横芝の碑（その四十）

郷山の瘡守稲荷

横芝駅前の防火用水の所から左に曲った道路は、そのまま栗山川の堤に突当ります。そして、その堤伝いに旧一二六号国道に通じています。この路を約一〇〇メートル程進んだ右側に、うっ蒼とした大きな樟の木に覆われた小高い丘があって、樟の木の根本には、約三〇センチ角、高さ七〇～八〇センチの石塔が建っています。これを附近の人々は、郷山の稲荷様と呼んでいます。

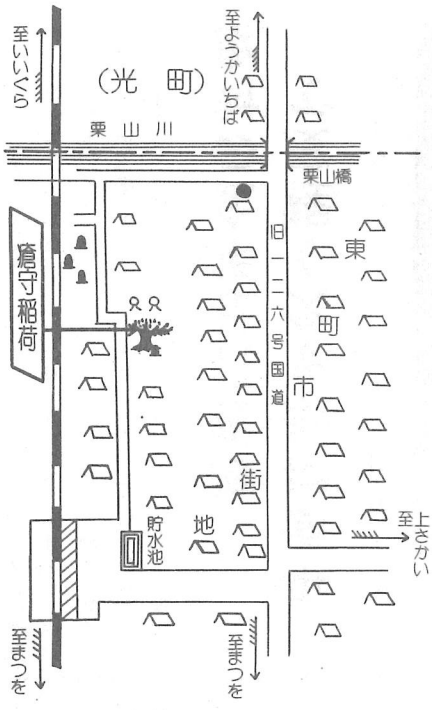
昔、まだこの辺りが本当に淋しく、表の通りも、ようやく荷車が通れる程度であった頃、近くには草鞋や大福餅等を商う茶店と、女中さんを二三人抱えた、上州屋という居酒屋等僅かの民家が建っているだけでした。それでも、栗山橋際にあった米の集荷場に出入りする人々も多く、なかなか繁昌していたということです。その上州屋の裏庭続きになっていたのが、この郷山と呼ぶ丘だったのです。

或年のこと、この辺り一帯に皮膚病が蔓延して大変苦しみましたその中に、誰いうとなく、「郷山に願を掛けると、願いが叶う」という話が伝わり、樟の木の根元には、赤飯や餅、魚等が沢山供えられました。ところが、それまで軒並といっていい位流行っていた皮膚病が、ぴたり、と止ってしまいましたので、寄篤な人々が相談し合い、お礼のために建立したのがこの碑だということです。ところで「郷山の神様は何神様なのだろう」ということで揉めましたが、お供え物の中で、魚や油揚等が一番早くなくなっていたので、「きっと、郷山に住んでいるお狐様のお陰であろう」「皮膚病を癒してくれた神様」、ということから、瘡守稲荷大明神、と刻んで祭ったのだそうです。稲荷様の祭神は、元来狐ではなく、お使い番とされているのですが、何となく稲荷様に結付けてしまったものと思われます。

昭和の時代になってからも、この辺りに不幸が続いた時、「郷山稲荷のお祭りを忘れているためだろう、」と、昔のことを知っているお年寄達が先立ちになって、赤い幟を立て、赤飯や油揚等をも供えてお祭りをしたことがあるそうです。その御利益については、よくお聞きしませんでしたが、其後子供さん方が、この稲荷様を、習字が上達する神様として尊敬し、毎年二月の初午の日には、障子紙や、半紙を貼り合せて幟を作り、奉納、正一位稲荷大明神、何某と署名をして献納する風習が続いていた、という話ですから、きっとその御利益もあらたかだったのだと思います。

○写真はその碑で、瘡守稲荷大明神、明治二十四年、当町川島彦三郎、宮沢某等と刻まれています。後は樟の大木で、周囲は十数メートルもある様に思われます。昭和四三年頃、一度此処を訪れたことがありますが、その時の私のメモには、いま一基、別の石塔が建っていて、奉納六十六部供養、宝永三丙戌天三月吉日、横柴邑浄念等と刻まれていたことが記されていますので、折を見て、この周辺を改めて探訪できれば等と考えています。

（本稿取材に当り、東町の土屋源吾氏《町文化財保護委員》の御指導を戴きました。尚、この稲荷様が鎮座在します場所は、同氏の御親戚の方の所有になっていて、同氏が管理しておられることを申添えます。）

註　瘡守＝かさもり、と読むそうです。

（養護老人ホーム小沢所長寄稿）